

追悼

明智秀胤・千葉正健

佐藤秋雄

私が、明智秀胤こと千葉正健を意識したのは一九六六年九月共産主義者同盟再建大会となる、いわゆる「第二次ブント六回大会」後である。

私は、この六回大会議案書の内容と、人事に対する不満から初日から途中退席している。千葉正健は『さらき徳二著作集第一巻解説』で「M・L派社学同の副委員長で中央大学出身のKが……」と述べている、この中央大学のKと千葉正健は「ブント再建六回大会」に出席していない。

中央大学のKは、ブントM・L同盟分裂の最終局面で、東海大学の。

HとKと私の三人で新宿区落合のアパートで会に出席しなかつたその不自然さを感じた。同時にこの不自然さは、明智秀胤にも感じていたものである。

私は、品川・太田）は中央労働学院出身、または中央労働学院に関わった青年労働者（女性も男性も）たちを中心としていた。明智秀胤は、その最高幹部であり「六十年安保闘争」を闘つての冒頭は、「われわれの運動

五日『若きボリシェヴィキ』第二号で「統一戦線戦術とは何か」理論研究のために「において、ブント指導部を理論的にも現場指導においても批判的に分析していた。このような理論・実践活動は、ついに、独自の「党宣言」、独自の共産主義運動として開始することとなる。

一九六一年九月一三日付文章は、「われわれの運動の出発に際して」と題された檄文は、とても格調の高い共産党宣言である。自らその指導に当たりのちのブントM・L同盟と「ブント再建六回大会」を組織する基礎をなした。

一九六〇年五月五日すでに共産主義運動の指導を意識して以来、ブントのそれぞれの分派・革命の通達派・プロレタリア通信派・戦旗派などにシンパシーすら感じることなく、社会主義青年部の労働者、日本証券鋼所青年部の労働者、日本証券新聞記者、中小企業で働く多くの労働者たちが社会主義青年運動（SM）出身の労働者たちであった。

そして、このSM、ブントM・L同盟と関西派を統一させ、「マルクス主義戦線」派との統一としての「ブント再建六回大会」いわゆる第二次ブントである。ところで、格調高い、この明智秀胤による「共産党宣言」は次のような文言からなっている。

この文章は彼が二歳時のものである。この明智の「共産党宣言」こそ、彼の精神をなし、第一次ブントの最大の功績として唯一のことからして、憧れだと！と言つてゐるのだ。

て全人類の解放にまで至る永続的な革命運動を推進することを目的とした共産主義者と社会主義者と民主主義者を包括する生活共同体である。」そしてその結びは、徹底した反スターリン主義と同時に代議制民主主義と多数決主義への批判である。その全文は、

明智秀胤は、一九六〇年五月二〇〇九年早稲田大学での京大加藤教授は「六〇年安保とは岸を打倒したことこそ意義だ！」と。この様な低水準の総括こそがプロ通派を先頭に革命的共産主義者同盟に加盟したどうしようもない第一次ブントの有志と行動の統一がもたらされた場合のみであつて、他人によつて強制された力はゼロであろう。強制された死の力と自由の生命力とどちらが強いかやつてみようではないか。共産主義運動とは、自由を求め、自由を実現する運動であり、この世界で自由の力ほど強いものはほかにない。

我々は公認共産党が投げ捨てた自由の旗を拾い上げ、我々の運動の先頭に自由の旗を高く揚げて強く生き抜くことを、ここに誓う。

一九六一年九月一三日

この文章は彼が二歳時のものである。この明智の「共産党宣言」こそ、彼の精神をなし、第一次ブントの最大の功績として唯一のことからして、憧れだと！と言つてゐるのだ。

た事としている。つまり、文化革命と位置づける。

文化革命とは、前衛党神話を崩壊させたことである。

戦旗派・プロ通派は、何故に別党コース・ブントを自ら結成したのか、そして六〇年安保闘争こそが前衛党を乗り越えたということ。これがブントと六〇年安保の意義である。

南部地区委員会（日暮・港・

藤教授は「六〇年安保とは岸を打倒したことこそ意義だ！」と。この様な低水準の総括こそがプロ通派を先頭に革命的共産主義者同盟に加盟したどうしようもない第一次ブントの有志と行動の統一がもたらされた場合のみであつて、他人によつて強制された力はゼロであろう。強制された死の力と自由の生命力とどちらが強いかやつてみようではないか。共産主義運動とは、自由を求め、自由を実現する運動であり、この世界で自由の力ほど強いものはほかにない。

我々は公認共産党が投げ捨てた自由の旗を拾い上げ、我々の運動の先頭に自由の旗を高く揚げて強く生き抜くことを、ここに誓う。

この文章は彼が二歳時のものである。

この明智の「共産党宣言」こそ、彼の精神をなし、第一次ブントの最大の功績として唯一のことからして、憧れだと！と言つてゐるのだ。

千葉正健・明智秀胤は一九六〇年段階で思想・哲学上すでにブント・六〇年安保闘争を総括していたと言つて良いであろう。

この実態とは運動組織実態と思想哲学上のコンコウと言う実態のこと。

(二)

私は、一九六二年十月以降「一部二部差別撤発」(カリキュラム、履修上、就職上)を学外を問わずスローガンとした。

第二「三角定期の学割での実現」を目指して東京駅・国鉄本社まで何度もデモ行進をした。

そして、「夜学連結成準備会」を専修大学生会本部氣付で一九六三年秋には全国の大学II部自治会で発送した。

後に知ることとなるのだが、東京理科大II部は(六〇年安保闘争時唯一夜学連は全学連から脱退までして日共指導下にあつた)夜学連本部であつた。法政大学や早稲田大学は学部ごとに自治会あり諸セクトの傾向性をもつたグループによつて執行部は占められていた。私は全くのノンセクト、どちらかと言うと民主主義青年同盟に近かつたであろう。それ故、第一回の会合には理科大学自治会も出席したのである。三回目ぐらいになると早稲田II政の田中、山本、明治の学苑会伊波、II政の村谷、長

明学や東洋大は新聞会のみ、一九六四年夏、東京オリンピック間近になると早稲田II政と明大学苑会のみとなる。なぜなら「日韓会談反対、オリンピック反対、水不足の責任をとれ、東龍太郎打倒」などスローガンにする。あわせて授業値上反対もスローガンすることによって日本共産党や社会主義協会系の自治会やサークルは、専修大学学生会本部に寄りつかなくなつた。加えて、「授業料値上反対」も掲げたため学内でも孤立化の傾向を強めていた。

もちろん、以上のような諸セクト・思想的傾向性については、もう少しと後に知ることとなつた。いづれにしる、山中明、松本礼二、明智秀胤、さらぎ徳二など年長者と知り合つたのは一九六四年の秋から暮れであったのは疑いない。レボルシオン社(青年社)や東京学生会館への出入り、そして、南部(元S.M.)の労働者との交流、労働争議への支援活動、ここで六〇年安保闘争時の闘士で次のような人々とも知り合つた。王子郵便局の大塚さん、牛込郵便局の岡部さん、大崎郵便局の長崎さんなどなど

六回大会前に紹介されていたのであった。私の六回大会開催中の途中退席とは、私を含む苦学生・労働者の顔、そして、蒲田の赤旗銀座の労働者の顔、大塚さん、長

崎さん、岡部さん、桜井さんなどの顔が脳裏をよぎらなかつたと言えば嘘になるであろう。

月二日後、千葉正健流には医学連のSと私の「ボス交」によつて、私の東京都委員長、Sの地盤反戦世話人は、交替することとなつた。南部地区専従となつていた私は都委員長となることを前提としていた。ところが

「二・二協定」によつて事態は急を要した。

Sの都委員長、私の反戦世話人はこの「ボス交」によつて成立了。そこでSは、そのような意味では、予見において、政治的見通しにおいて私より一枚も二枚も上と言つべきか。私は、こうして、六四・六五年ごろの心ざし(革命的労働者建設)と必ずしも一致することなく、"ブント系反戦"を代表、学生主

義的街頭闘争の最先頭に立つことはとなつた。おりから敗けずぎくのでも「遠方から」物申すのでもなく、かようなブントは自己の飛躍を賭して打倒されねばならないのである。

かようなブントから「遠くにゆく」のでも「遠方から」物申すのでもなく、かようなブントは必ずしも一致することなく、"ブントの総括とは党建設のことである。それ以上でも以下でもないのであつて「アレがなかつた、コレがなかつた」ではある。それ以上でも以下でもない。建設されるその党は、唯

一の前衛でも中央集権主義でもない。

前衛党は、林業者・漁民・農民にも婦人にも青年にも工場労働者の中にも存在する「オレだけ」が前衛なのではない。

かつてのブント指導者に労働者と友人や知人になろうとする意識はなかつた。労働者に寄り添い、寄り添われてともに前進しようとする熱意・情熱・パートス・執念を感じたことはない。現在(いま)もつて『資本論』が、マルクス主義がと、七〇歳にならぬとしてなお中学生か高校生

みたいなことを言つて学生を集めている。党のカードルを目的的に追及するのではなく超空間的非実践的にサークル活動を旨としている。これが今日の「ブ

ント主義者」である。共産主義運動の退化の極みである。職場・工場内にサークルを作るのではなくである。

「共産主義者同盟統一委員会・第二回大会報告決定集」一九六六年六月九日、先駆社発行。

この報告集なる小冊子は(1)、共産主義者同盟の総括と我々の現時点、(2)、我々をとりまく国際情勢、(3)、国内情勢の分析、

(4)、階級情勢と我々の基本的

態度、(5)、当面するわれわれの政治方針、(6)、第二次同盟の建設の任務について、(7)、組織方針、(8)結語、(9)、共産主義者同盟規約。をもつて「……報告決

定集」としている。

「共産主義者同盟統一委員会」と自己を規定したこの同盟は、わずか三ヶ月後に「マルクス主義戦線派」と統一し「第二次ブ

ント・ブント再建六回大会」を組織した。

「ブント再建六回大会」議案書は、「マルクス主義戦線」派・共産主義者同盟・第五回大会議案書を横すべりさせたのである。この「マルクス主義戦線」派・第五回大会議案書を丸のみ

したのが、「統一委員会」指導部は、一九六七年「二・二協定」後二月二十五日には学対部長は箱根を超えて西へ。そのほどぼりさ

である。私が「再建六回大会」開催初日に途中退席した理由には、わが指導部に対する不信の念も含まれているのである。

めやらぬ一九六七年一二月末には上京である。

(二)

六〇年五月五日、六一年九月一三日、そして『さらぎ徳』著作集第一巻解説、基本的にこの三本の論文において、明智秀胤、または千葉正健のブントに対する、あるいは、第二次ブントに対しての自らの立場とその評価を明瞭に語っている。したがって、自らの革命家として立ち位置をも表明している。

ところで、私は、明智こと千葉正健を意識したのは、一九六年九月以降と述べた。

一九六四年から山中明、松本礼一など労働者運動を通じて知り合っており、SM事務所・ブントM・L同盟事務所(レボルシオン社)で右田昌人・千葉正健とも顔見知りではあった。とりわけ、六五年日韓闘争の一連の終息のうち南部地区委員会に所属したこともあり、さらぎこと右田を蒲田での学習会・サークル活動に誘った。学習会メンバーの中心は旧SMの活動家である。

中央大学のK・明智はともに六回大会に出席していない。その理由について、しばしば尋ねた。Kは殆どその心情を明かすことにはなかつた。千葉正健は出獄後(一九八一年?二年)挨拶を行つたおり、再再度詰問し

た。千葉正健は多くを語らなかつたが、「街頭主義になる、学生運動が主流になる、革命運動と異なる」など断片的に語つた。私は以後、「明智さん」ではなく「千葉さん」と呼称を変えた。

千葉さんは、プロ独立研究会、ブント総括、○○○研究会などなど、一九八〇年代前半から中ほどまで何度も学習会をもつた。また、党建設についても相談を何度か持ちかけた。しかし、彼は「われわれの運動の出発に際して」で主張する“綱領”的精神(ある種彼の原理原則)を超えることはなかつた。

一九八〇年代から今日まで、千葉正健・藏田計成さんは住居が近いこともあり、何かと相談に乗つていただいていた。六月末、守田典彦の死亡と千葉正健の訃報が相前後してもたらされた。

千葉正健の急逝は想像もしていなかつた。だけに驚き動搖を禁じ得なかつた。政治生活上は数年も先輩であったが、自然年齢的には一歳の違いで同年代と言つても失礼ではないであろうだけに身につまされるものがあつた。千葉正健は二〇一一年五月一六日、自宅にて死亡

田奉仕園リバティーホールで約三〇名の参加をもつて執り行われた。

主催事務局、よびかけ責任者は、藏田計成、高橋進、守健司、草丘望、4名である。

一〇月一〇日、千葉正健にゆ

かりのある人々、とりわけ元SMの方々、中央労働学院出身者で大阪からかけつけていたたいだ方、また、篠原浩一郎さんや岩田昌征さんは、千葉正健と直接面識はなかつたのではと思われる。

私は、一九八〇年代豊島文化会館出版委員会とそこでの出発に際して守田典彦と守田計成、千葉正健両氏には、守田典彦の晩年とその著作集出版に当つて多く助言をいただき、編集委員に名を連ねて会つた方々を誘つて出席した。

藏田計成、千葉正健両氏には、守田典彦の晩年とその著作集出版に当つて多く助言をいただき、編集委員に名を連ねて会つた方々を誘つて出席した。

私は、一九八〇年代豊島文化会館出版委員会とそこでの出発に際して守田典彦と守田計成、千葉正健両氏には、守田典彦の晩年とその著作集出版に当つて多く助言をいただき、編集委員に名を連ねて会つた方々を誘つて出席した。

八木健彦さん、濃美丈夫さん、それぞれに一九六五・六年

当時(先駆社時代)のことを懐かしくも、これからのがんばることを語り合つて、いつまでも一緒にいたい。

千葉正健は、私の心中に、

そして多くの共産主義者の心にある。茨城からきた農民A(元SM)は、散会後、帰りの道すがら、あの「鎌打銃による岩田昌征さんは、千葉正健と直面識はなかつたのではと思われる。警察官狙撃事件」と一個の革命家として孤高のうちに亡くなつた同志千葉正健。かつての指導者に対し悲痛な思いを語つていた。革命家と生活者との精神の形成における愛についてである。そこには大きな溝があつたのではないか、その溝には愛憎が深く関わつてゐるのではないか、と。彼は、農民らしく、とても文学的、すなわち哲学的に千葉正健と元SMを観ている。

千葉正健を心より追悼し、孤高の革命的精神に学ぶものである。

千葉正健は精神的豊さと政治的抱擁力のある革命的組織者で、明智秀胤・千葉正健よ安らかに眠れ。

二〇一一年一一月一一〇日

強制撤去せよ

東京・霞が関の経産省前で4カ月以上

テント内の泊まり込みを続けていた反発団体が27日、同省前で「抗議集会」を行つた。今月24日に枝野幸男経産相が防火上の理由から撤去命令を出し、期限が27日午後5時に設定された。警察官50人が警備に当たるなど物々しい雰囲気になつたが、大きな混乱はなく、強制撤去も行われなかつた。同団体の淵上太郎代表は「テント内の火氣に撤去命令を出されたくない、けたついの危険な原発を止めねば」と約700人の参加者の前に訴えた。その後も「原発いらぬ」「消税反対」の前に福島を返せなど同省に向かって抗議を繰り返した。同省は、同団体と話しあいで解決を求めると思われる。

ト撤去拒否を訴える人々

経産省前の抗議集会で、テント

経産省前テントが期限、



抗議集会に700人超